

杉田玄白の絶筆と河口信順

川島 恂 二

序

私は大正八年（一九一九）古河市こがに生れたが故に、土井藩御側医おそばい蘭医河口家に取りついている。

昭和十四年私が旧制理一乙で本郷曙町拾五番地古河寮こがりょう（土井藩下屋敷であつたが明治政府後、土井侯屋敷となり、その東北隅を削いて貰い、町の有志佐藤長之介町長らの努力で二階建の古河郷友会を作り、二階の六部屋を古河出身学生に開放した。毎土曜に郷友会長東大文学部藤懸静也博士御家老や旧古河藩士が階下の食堂兼会議室に集まり、夕食には我々学生も御馳走になり、都度静也教授の古河物語の一席を拝聴した）の時、医師志望の私の為に「河口信任」を講じた静也先生の御蔭で、私は初めて河口家と偉大な解剖学者がいた事を知った。

その十四年夏に京城帝大解剖津崎孝道教授が来河されて「河口信任」の講演をし、信任の独文紹介冊子を父（眼科）は貰つて来て、この独逸語は易しいからこの夏休み中に読めと渡したが、一年生の私に読める筈なく、二年の夏休みに読んだ。こうして旧制高校時代に、私は藤懸・津崎の両教授を介して河口信任を識った。

理三乙の時の独逸語の副の英語授業で、後に東大教授になった上野景福教授が、英文「世界解剖史」を一年がかりで講じてくれたので、ヴェサリウスや血液循環発見のハーヴェーハーヴェーだの外国の偉い解剖学者を知った。

東大に落ちて千葉に入ると、戦争が始まって学年短縮が施行されて物凄く忙しく、三年の時、ふと病院から精神科の前の楠木の大樹の緑の美しさに魅かれて、ハッと眺めたら夏だった。約一年間、秋も冬も春も全く気がつく暇がなかった。それほどに学生時代の勉強は寸暇なく忙しかつた。だから、それから復員(三五一師団水戸独立工兵連隊付軍医)するまでは河口信任は忘却の彼方だった。

私が薬理の講師の時に、藤懸静也先生の弟の広陸軍中將軍医総監と上野駅で知り合った。それは古河寮に古河の偉人の列に並んでいた。私も未だ軍服だった。思わず直立不動でパツと敬礼をし「藤懸総監であられますか？」(おー、そうじゃ)とお伺いを立てたのが切っかけで、古河まで混雑の闇汽(やみ)車(くるま)で話し合った。幸い私は古河寮で沢山古河の事を教わっていたから、話が弾んで、これを契機にお近づきを得た。広先生は一高、東大コースだが、軍医依託生のままで東大生化学隈川教授下でアルバイトをし、学位を取られていたので、広先生の生化学と私の薬理学とで、より二人の話は何時(なんじ)も弾んだのである。

だから私が遊びに行くと凄く喜んで沢山昔の古河の事を教えてくれ、晩年中傷半身不随で倒れてからは、河口家の事も、何でも話してやるとして教えて下さった。

広総監は山県有朋の主治医で熱海の椿山荘に一年半ほど勤務したので、山県公の思い出も沢山教わった。また、満州事変熱河作戦では三百米先に彼我の白兵戦を見、野戦病院は如何に対処したかも、教わった。とにかく、死期を悟って「俺(わ)はあと半年は持たぬから何でも君に教える」とて話してくれたが、私が知らぬ事があって「いや全く存じません」と申し上げると「君はそんな事も知らんのかッ」と凜然たる叱正の言葉を頂くので恐かった。ちょうど、緒方富雄教授の晩年、私は割とお訪ねさせて頂いたが、緒方先生がちょうど藤懸広先生同様に「君はこういう事を知ってるかね?」、(私)「いえ全く存じません」、富雄先生「そんな事も君知らんのかね」、(ハイ)、「困った奴だな。」「それは詰まり、こ

ういう事なんだ」と、あとはすらすらと沢山教えて下さるのだが、藤懸広先生も全く、それ式だったから、時々内心びくびくした。

広先生「僕は鷹見泉石と体も頭脳もそっくりに生れた。母ミノが泉石の末孫で五歳まで泉石の膝で育った（六歳で泉石の死に会う）。泉石は味覚が異常に発達していたが俺もそうじゃ。俺は、このゲシユマツク・ツエレンの種類、細胞の何処の部分が甘なら甘の多種の味分けを、如何にして感じ、また、感じ分けるのかを全部明らかにしたいと考えている。舌の部位別の塩、酸、辛、甘の感覚帯は判っているが、辛なら辛の識別帯の部の、どの細胞が、細胞のどの部位が、辛の多種を味わい分けるのかが知りたい。判れば自分の好みの味が判る細胞に、同じ刺激を与える方法を考えれば、季節でない物の味も、たつぷり味わえる次第である」という夢を語った。

富雄先生「雁が一行に飛んでいるが必ず先導者がいて、或る時は一行に、或る時は先導者を頂点に半々にクの字で飛び、或る時は右に数羽、左に十数羽とクの字で飛ぶ。列が乱れても、直ぐ先導者を頂点に飛ぶ。あの頂点に立つ先導者がどう命令すれば、各種のクの字型、または一行に並んだりの態型をとるのだろうか。一端クの字型が決れば視野から消えるまで、ずっとその態型を保って飛んで行く。あの命令はどうやって発するのだろうか？ と僕は何時もフツと考えてるんだけど、君判るかな？」

「判りません」「うーん、これは僕も判らないんだ。」——（それを聞いて私も安心）という次第だった。

とにかく、どうも藤懸軍医総監と、緒方富雄教授は同じような質問の仕方だったが、知らない事は知らないと言答すれば、よく教えてくれた。

それで藤懸先生は、河口家では河口信寛以後の人は全部接していたから個人評もして下さった。ただ十二、三歳までは寛さんに漢文を習ったが、優しい品の良い老人に過ぎなくて、緒方洪庵に江戸で接触して、大学東校の教授補佐をしたほどの偉い人とは知らなかった。眉の太くて長く、大柄の人で我々を孫のように可愛がって教えてくれた。とか頻りに半身不随の臥床の身ながら頭をもたげて考え出してくれた。

軍医総監は年内二度目の発作出血があつて、自身で予後を診断していた通り、「君とはあと半年で別れるぞ。」と言つていた通りに亡くなられた。

河口家に就いては充分教えて貰え、有難かつた。

古河郷友会長藤懸静也先生、千賀寛次先生（九十四歳没。厳格な武士で皆恐れて近寄らなかつたが、私は図々しいから最後まで接して沢山教わつた）、広総監と順々に死んで、江戸に出て学んだ先人の声は消滅した。私が最後の聞き手だつたから、私が死ぬと、遂に江戸末期から明治までの古河出身先覚者の声を伝える者は絶滅する。

絶滅させてはならぬから、それで私は静也先生に昭和十四年に古河寮で受けた先輩の命令「河口信任を世に出せよ」を守つて、『河口信任』伝を出版した。

*

*

静也先生は古河寮で河口信任を話してくれた時に、河口と鷹見はすぐ隣りだから泉石はちよろちよろツと信任の家にはすぐ遊びに行つた、と黒板に書いて話した。

私の知っている河口と鷹見は歩いて十分位の距離で、すぐ遊びに行ける隣りではない。昔の武士共は、駈けるように歩けたのか？ と考えても見た。がこの謎は鷹見家調査中に氷解した。昔は本当に一軒置いて隣りだつた。でも私の知っている今の鷹見の家は、幕命で古河蟄居となつて、元の昔の屋敷に入れぬので、今の城外の罪人屋敷を修理して入つたから、今日では十分の距離となつたのである。が、そうした関係は、江戸時代育つた古河城武士と同感覚で話してくれるから、しばしば地理的關係がのみ込めなかつた。

広先生も「川久保の庭に駈け込んだり、長尾の屋敷を駈け抜けたり……」と子供時代の剣術遊びの話をしてくれても、城内の二の丸だつたり三の丸だつたりで、今は城が土手の向うの河川敷になつてゐるから、急には判らなかつた。半身不随でも広先生の記憶は、子供時代も正確だつた。幕末を救つた藤懸御家老の背で、五歳の自分は遠山の名を皆指^きせたの

で、泉石そっくりの孫が出来たと喜ばれて育った思い出なぞ、目の前に見えるほどに語ってくれた。

だから河口信順、信寛らが古河城の清水四兵衛水手の調達してくれた船で江戸に出る姿なぞ、広軍医官が笈を負って江戸出発の様子と交えて教えてくれたから、江戸箱崎の土井下屋敷に着くまでの船の様子もよく判った。

だから「河口家の人々と河口信任」を書くにも、私は当時の情景に融け込んで書く事が出来て、幸せだった。

河口信順

河口ナツ（河口久雄妻）祖母の実家の孫信田善之助君（戦死）と私は、小学同級だったからナツ女は、私を善ちゃん同様に扱って接してくれた。ナツ女の長男後継ぎの当主河口信広氏は小学二級上で知っていた。河口家は父の患家でもあった。という訳であったから、私が河口家を調べたいと訪ねたところ、何一つ隔てるところなく、家族同様に取扱って貰えたから、私が戸袋を引いて、物置から埃だらけの書棚を畳の上に払げても、嫌な顔一つされた事はなく、幸せだった。

ナツさんから、河口信順は子の信寛、信久にそっくりの顔と姿だったと聞いた。信寛が幕末から明治になった直後殿様との写真があるので、信順の顔形が判った。更に信順は河口信任の生き写しのような孫だったから、信任がとっても可愛がっていた事も知った。現当主信広氏は、藤懸広軍医総監の言では喋り方も歩き方も宛然に信寛さんにそっくりだと聞いた。して見ると結局、河口信任と信順と信久と今の信広氏は大体同じ体格で同じ顔と判った。

中でも信順さんは一番背が高く偉丈夫だった事を知った。それで強弓を引いたので、土井利位とよが刈谷土井藩の四男から古河に貰われて来たのが文化十年十一月二十五日で二十四歳だった事、これを迎えた殿様御学友に選ばれた信順は二十一歳だった事と、二人で城内で弓術を競った時に、いつも五人力の弓りきを引いていた信順さんが殿様を負かしてった事も、聞いた。

すると帰宅した時に「殿様を家来が負かすとはこの不忠者奴!!」と、信宜さんの妻多嘉さんから大変なお叱りと打擲があった。以後信順は殿様には絶対従い、殿様を庇う青年になった由と、聞いた。

私見するに、シーボルト事件、蛮舎の獄事件と、利位が利厚の次の正式殿様となつてから、二回、土井藩が疑われた。都度、蘭医信順が剃髪と、殿の菩提寺の正定寺に入山の処分を受けたのは、利位公を庇う臣信順の恭順であつたらうが、そうした素直な心掛けは母の薫陶から産れたものと考えさせられる。

文化十二年になると利位は江戸詰となつた。一方信順は信任も父の信宜も死に、兄も幼没しており、鷹見泉石(御小姓で江戸詰)に連絡すると杉田玄白塾に入門許可を、藩に届出よと教えられ(その頃、泉石は玄白の養子伯元の長子鶴松のオランダ語家庭教師をしていた)、文化十二年春四月、藩に玄白方入門願い(現存)を提出した。

この裏には土井利位も、学友河口信順が江戸に出てくれた方が嬉しいから、泉石に内諾を与えてあつたとも、考えられる。で藩は直ちに許可をしてくれたから上京準備万端を整えて、文化十二乙亥年五月二十四日古河を船出し、渡良瀬、利根、江戸川を下り、翌二十五日には藩の箱崎屋敷に着いた。

泉石が待つていてくれて、翌二十六日には杉田氏の天真楼塾に入門させて貰つた。

信順、杉田玄白の天真楼塾に入門

玄白は「解体新書」を纏めるについては、集められる限りの輸入済オランダ解剖書と、本邦既刊解剖書は全部集めて参考にしてきたから、河口信任著「解屍編」も集めて知つていて、本邦初に自ら解剖刀を執つた勇氣のある先覚蘭医の河口信任を尊敬していた。だから信任の孫の信順には特に厚い好意で遇し、天真楼塾頭杉田伯元に特に依頼、面倒を頼んだ。伯元は長子鶴松が鷹見泉石に就いてオランダ学を教わっているし、老中土井藩の内の者に付き充分の配慮があつた。

一方入門生河口信順は、殿の御学友勤めであったから礼儀正しく、しかも他の塾生も驚く猛勉家だった。陽性剛放磊落で明瞭凛然の好青年であったから沢山の友人が出来た。

中の一人越中富山藩の長崎玄碩(浩齋、健)なる篤学者は大槻玄沢の氣に入り弟子で、桂川甫周にも師事し、玄白の『蘭東事始』『蘭学事始』を筆書と上書の二部を所持し猛勉家だった。

玄白先生に直々に一回会いたが果されず、河口信順が玄白のところに唯一人寄偶書生でいる姿を羨望し、信順から玄白の様子を聞いていた。玄碩は伯元よりも杉田立卿に師事した。玄碩は文政十年古河の河口邸に遊びに来たし、文政三年天保四年には玄白の隠居所、鉄砲洲にあった清曠楼で、信順と共に玄白、玄沢の法事にも参加し会合をしていた。

信順はこうして特別猛勉優良生と交わってよく勉強をしていたから、昼は天真楼で学び、玄白邸に帰宅すると、玄白先生の詩友となり、兼、小間使いをしていた。

信順は玄白から教わった事は小豆に「陶齋雜録」なる自ら作った白文帖に細かく雑事雑件も含めて記帳していた。(信順は陶淵明詩が好きだったので陶齋を号した)

だから、文化十四年正月試筆の玄白の書を、五点も貰っていた。十四年四月十五日、玄白は老衰死をした。信順が玄白の傍にはべって、玄白先生が書く姿を見守っており、出来上って「どうだ」と玄白がお茶を飲む相手を勤めた。玄白は八十五歳の力を絞って得意に絶筆した。

そんな事で、利位の御学友であった信順は、殿様御相手の要領で玄白を褒めるのが上手だったのだろう。「そんなに気に入ったのなら、七草が過ぎたら、お前に遣ろう」と、この五点を貰った。これが絶筆となった。

玄白の絶筆、河口家に見つかる

昭和三十八年五月、私は古河の河口信広氏方の蒲団押入れの奥の隅から、横たわって納ってあった長幅を取出した。それは、信広氏が「杉田氏書」と幅の裏に小さく書いてある事を私に教えてくれたからであった。理由は、私は昭和三十七年、杉本勲先生と鷹見安二郎氏の推薦を得て、緒方富雄先生会長の「蘭研」に入れさせて頂いた。

それは「河口信任」を世に出せと、昭和十四年に藤懸静也教授から古河寮で命ぜられていたからであった。そして緒方先生に杉田一族を教えて貰ってから、河口家蔵「杉田成卿賛、枚田水石画、河口杏齋学友宛成卿為書のヒポクラテス画像」に就いて昭和三十八年四月初陣の発表を終り、次は何とか玄白先生の書がないかなあ、と信広氏に嘆息したからであった。信広氏はそんな偉い玄白さんの書いたものは聞いていないが、杉田氏書と小さく幅の隅に書いてある大きくて邪魔な幅が、私達の蒲団の押入れにあるけれど、と言ってくれた。

それで、何はともあれ拝見させて貰う事にした。私は成卿さんの大幅かなと思って、まずは鴨居から、くるくると畳に伸ばして幅の書を眺めた。

すると「あれッ」と立ちすくんだ。九幸老人書とある。印は子鳳、田翼之印の二印が押されている。

緒方先生に教わったばかりの九幸が、ちゃんと書いてある。「ありゃー、これは杉田玄白先生の書だ。大変だ。」と私は、ぶるッと来てしまった。

「清曠楼の賦」の大幅だったのである。(海上新たに築く清曠楼、云々長文)(今、大阪緒方洪庵塾にある)

*

*

それで私は渡辺武夫教育長(私の小学校先輩、土井藩武士、後に蘭研会員で土井利位、雪華図説の研究家)を動かし、鷹見安二郎氏(蘭研会員)を動かし同三十八年八月に、河口家の家屋内の屋探しを行った。

(既に千賀寛次郷友会長調査整理済の信任、信順の殆どの大量の蔵書は東洋文庫の岩井慧章館長が、河口信広氏の無智につけ込んで、盗んで東洋文庫蔵としていた)

すると見つかった。亦々あつた。嬉しかった。「医事不如自然」の縦書一幅。宝曆十二年唐津から移封の箱に、多数の幅や書状の中にこの一点。他に信任、信順の手書きの文書やら成卿筆多数幅が見つかった。

*

*

これに気を好くした我々三人は、裏の物置の二階にある古い医療具、医療函、蔵書類の箱なぞを、翌年夏休みに再度、総掛り調査を行う事にした。私はそれで丸二日臨時休診をした。

この昭和三十九年八月には、器物が多過ぎるので史学部学生で古河から東京通学の二人を擱えて手伝つて貰つた。即ち伊藤徹君(中大史学)、鷺尾政市君(法政史学)である。未だ百年以前の軟膏がこり固まっている診療箱を掃除して貰い、抽出し整理を頼んだところ、間もなく、下の大抽出しの中から、まくりを引き出した二人が「九、九の字は判るよなア」と大声をあげているので、私は「九幸か？」と叫んで駆け寄つた。

正に九幸老人の書のまくりが三点も出て来たし、序に信任の孫に与える学びの訓えやら、信任の門弟の血判署名入り入門書三通とか、この抽出しからは沢山出た。

「医事不如自然」(横書)

「いろはにほへと……」(試筆、文化十四年正月)

「神農氏」

の三点の玄白書が見つかった。

以上、合計五点玄白書が出て来た。

これらの書は総て、信順が玄白と起居を共にする一軒に、書生として学んでいたからこそ貰つて来られた書であつた。

玄白の別荘「清曠樓」の御蔭だった。

緒方富雄先生には葉書で速報したら、「もう待ってられないぜ、君。すぐ写真にして持って来て説明して下さいよ。」と直ちに電話を受けた。

*

*

それらは蘭研でも医史学でも発表をした。

絶対に色紙を書かない緒方富雄先生に、石原明先生が「川島さん、このチャンスに絶対緒方さんに色紙を一枚書かせちゃいなよーウ」に、私「何て書かせちゃうんだい？」に、「医事は自然に如かず、と書かせんだよーオ。緒方さん凄く感激してんだから、このチャンスだよ」と教えてくれたから、お願いしたら「君だけは特別だ。書いてやる」と約束してくれたが、あとが大変。「僕はそんな約束を何時何処でしたんだッ」とうそぶいて書かない。杉立義一先生が何年も何年も書いて貰えなかつたのに比べれば、私には、それから半年で書いて下さり、「僕の家に取りに来たまえ」の電話で色紙拝受に伺った。

これがきっかけで、私は、緒方先生が亡くなる半年前まで（日大内科入院。恍惚の人となられ、子供のように無邪気な先生となつたが、私の事は判っていて、川島君ねエと喜んで結構むずかしい話をして下さった）、時々緒方邸を問い、遂に、緒方・川島合作の色紙二点、幅三点を書いて頂いた。

私は玄白の幅のお蔭で、緒方先生に相手の一人にさせて頂き、杉田家と河口家の間柄が随分判つたのである。

*

*

緒方先生の前に、色紙を書いて頂いた小川鼎三先生も亡くなられた。鼎三先生には河口家で、河口信任と共に京都で解剖をした原田尚賢（維棋）直筆の「蔵府図志」の一冊を見つけて医史学に発表をして、「解屍編」で解剖をした時の仲間に、もう一人原田がいた事、河口が原田を仲間から外した理由を述べたところ、「近頃の医史学会で、君の今日の発

表は正にホームランに均しい」と褒めて頂き、これも石原明先生の智慧の差し入れを受けて、間髪を入れず小川教授の熱の冷めぬ間を利用して、一枚書いて頂いたのであった。今の酒井シヅ教授室で。

まあまあそんなこんなで小川先生も緒方先生も去られ、私はここで平成元年『歴代蘭医河口家と河口信任』（近代文芸社、五千円）をやつとこ纏めて発売をした。

これで、やつとこ河口家も、玄白先生も資料出尽して終った、と私は決めて、次は古河藩女流南画家「奥原晴湖」の纏めに入った。晴湖は鷹見泉石の有力の子分であったから、封建の殻を破つて、画風も書風も、封建の殻を破つて自らの独創の詩画境を作つたのである。

河口信任—鷹見泉石—奥原晴湖と流れる非朱子学者のこの三人の三本柱が近代古河藩の文芸復興者である。

それで私は平成三年『画賛から見る奥原晴湖』（六本本りん書房、一万円。直接〇三—五五六三—〇八九一注文）を書上げ発売し、さばさばして、河口家の多少未整理文書が、出来上つたばかりの古河歴史博物館にあるので、それから後は時々整理に出掛けている。

*

*

最後の玄白の絶筆が見つかる

もう玄白先生の紙一枚も出てくるなぞ考えずに、淡々と河口信順と河口信寛の文書が、手紙と共に、ごちゃごちゃの部分で、一枚亦一枚、のんびりと分類整理をしていたら「あれッ」と眼が覚めた。時は平成三年七月二十日の午後二時だった。

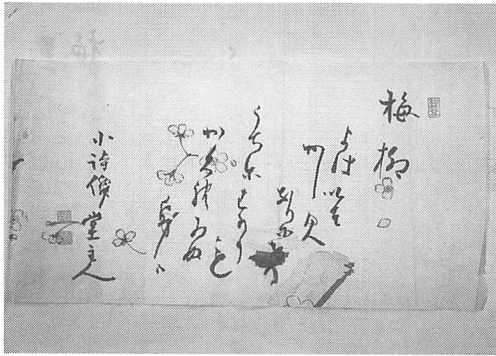
H 17・4×W 33 cm大の半紙大の淡彩白梅模様紙に、たどたどしい墨の跡は余り元気がないが、和歌の締めくくりには小詩僊堂主人と署名があつて、小さな二つの印はんこは「田翼」と「子鳳」である。書体は紛れもなく杉田玄白である。

「あつた。今頃あつた。」

全文は二カ所読めないが、「梅は咲いたが体は弱り、外に出られずなりました」という意は判る。それで同月二十八日に古河歴博鷹見家調査団長の青山学院の片桐一男教授に正式に御解説をお願いした。

梅柳 よはいそ かしく なりにける

うちにはかりも かくれぬ身ハ
である。



杉田玄白最晩年の絶筆
(河口信順蔵)

かくてこれぞ文化十四年正月試筆の先の五点を以て、杉田玄白絶筆とされて来たが、正月をすぎ、梅が咲き柳の新芽が出て来てから歌ったこつちの方が、その後だから、正に今回の一点こそが遂に本当の絶筆と判った。

緒方先生は先の五点は絶筆に近いと記され、私に、これだけ元気に試筆をしている以上、日本の何処かから、まだ見つかるぜ、君。だから「僕は近い」と書くのだ、と申されたが、正に緒方富雄先生の予言の通りであった。

小川鼎三先生は「医事不如自然」の縦書を好み、「僕はこつちがいい」、緒方富雄先生は横書を好み、「僕はこつちだ。茶掛けにしたら、いいぞー、君」と、鼎三先生はキリツと口唇を結び、富雄先生はニッコリしたが、このお二人の先生も逝かれてしまい、私も七十歳を超え、来週は妻の十三回忌法事だ。そろそろ私も逝くけれど、今回幸運にも『杉田玄白先生の最後の絶筆(河口信順所蔵)』

を見つけられて、私はもう思い残す事はなんにもない。

(註) 本題「杉田玄白絶筆と河口信順」は、平成四年一月二十五日、順天堂大医史学例会に、スライド中心に発表をした。その「妙録」を書く訳だったが、別に「玄白絶筆発見に至るまでの、物語り」の全く別な見地からの随筆に書いて見た。

(古河市)

